

(様式2)

授業改善プラン

地域名	葛南教育事務所	学校名	習志野市立袖ヶ浦西小学校
-----	---------	-----	--------------

1. 課題（これまでの全国学力・学習状況調査結果等から）

令和3年度全国学力・学習状況調査において、本校児童の算数の成績は、全国平均値をやや下回るものの平均値に近い。

一方で、算数に比べて国語の成績は全国平均を下回る。各学級担任の肌感覚としても、技能に大きな課題は見られないものの、問題を読み解く能力に課題がある。算数の領域別に見ても「データの活用」が平均を下回っている。これらのことから、文章を正確に読み解き、情報を正しくつかむことが苦手であることがわかる。本校児童の課題は、学習素材を中心とした文章問題の読解力向上にあると考え、研究の副主題として設定した。

2. 取組のポイント

○研究主題「考える楽しさにつながる学び」

～学習素材や式の意味理解を高めることで、主体的に学習に取り組む意欲と態度を育む～

○重点単元を設定し、授業改善を図る。

講師を招いて研究授業を行うとともに、2学期に各学年の学級担任と「ちばっ子の学び変革」加配教諭とで重点単元を設定し、授業改善に取り組んだ。TTで授業に取り組み、ふり返りカードの記入と授業内容の検討を行った。

3. 具体的な実践

①学習素材を全体で読み解く時間を設け、児童一人一人が場面理解できるようにする

学習素材を児童に提示した後、全体で素材について話し合う時間を設けた。聞かれていることや、わかっていること（数値、条件）などを明らかにし、解き方の見通しをもたせるために、式や手順の予想を話し合った。

学習素材に色チョークで下線を引いたり、児童の発言を吹き出しなどで板書に残したりすることで、これまでは自力解決が難しかった児童も進んで学習に取り組むことができたり、学習問題の設定や話合いの論点を明確にもったりすることができた。

②線分図や関係図等を用いて、考えを整理するよう指導し場面理解に役立てる

線分図や関係図などの、図によって情報を整理する方法は、「素材を理解し問題を解くための武器である」ことを意識させ、情報を図に表してから立式することを徹底した。

これにより、児童は「わからないことも図にすればわかるようになるのではないか」という解決のための見通しをもつことができるようになった。

③具体物操作の機会を積極的に設け、学習素材や式の意味理解を高める

学習素材に即したイラストカードや数図ブロック等を用いて、具体物操作による理解を図った。特に理解が不十分な児童には、理解を深める効果が見られた。

5年生の「小数のわりざん」の学習では、全体の中の一部の面積を求める際に、公園を描いたイラ

ストカードを用いて、面積の見当をつけた。数式だけで考えた時には起こりがちな、一部の面積が全体の面積よりも広がってしまうような誤答を防ぐことができた。

3年生の「間の数」の植木算の学習では、木のかかれたカードを実際に操作しながら考えることで、木の本数よりも間の数の方が1本少なくなること気がつくことができた。

④一人一台のタブレットを活用して考えの共有を円滑に行う

自力解決の後、自分のノートを撮影し、teamsに投稿した。実物投影機のように、大型提示装置に映し出された画像を使って自分の考えを発表することができた。

考えを共有することができる他にも、自力解決に至らない児童は友達考えを参考にして自分の考えをノートに書くことができた。児童が自分のペースや理解に合わせて、他の児童の考えからヒントを得たり、考えを広げたりするのに役立った。

また、タブレットを使った情報共有が進めば、児童同士の考えを事前にタブレット上で伝え合った上で、理解しきれなかった点について話し合う等、反転学習のように扱うこともできるようになるのではないかと考える。

⑤習熟度別の少人数指導

児童の自己申告による習熟度別の少人数指導を行った。担任が一斉指導で行う「一斉コース」と、少人数指導教諭と「ちばっ子の学び変革」加配教諭によるTTで10名程度の「丁寧コース」に分かれて行った。

「丁寧コース」では、学習に自信のない児童も質問したり発言したりしやすい環境が用意できているため、意欲的に学習に取り組むことができた。また、児童が困っている状況をよりよく見取り、適切に助言することができた。

「一斉コース」でも、全体の人数が減るため、発表したり話し合ったりする機会を増やすことができ、主体的に話し合い、問題解決に向けて発言する姿が見られた。

4. 成果

研究主題として挙げた「学習素材や式の意味理解」を意識して授業を行うことは、児童が問題を解決していく必要感を高めることにつながり、学習のゴールを明確にしていくことができた。これは、児童が主体的に学習に取り組むことに結びついた。

さらに、研究授業を行い、講師の先生から指導をいただいたり、教員間で話し合ったりすることは、日常の中で取り組んできた指導の意義を確認することにつながった。

タブレットを使用した実践も多く行われた。児童が一人一台タブレットを持つことで、教師側にもタブレットを積極的に利用しようとする意識が高まった。

今年度の取組の成果を学校全体で共有し、日常的・継続的に取り組むことで「学習素材や式の意味理解」を高めていきたい。

◆担当指導主事から（葛南教育事務所 指導主事 川口 齊之）

導入時に、しっかりと見通しをもたせてから自力解決を行ったことで、どの児童も「今、何を考えた方がいいのか」を理解し、主体的な学習が実現できていた。また、比較検討時は、授業者が児童の考えや疑問を対話から上手に引き出し、考える場面を設けることで、より深い学びへと導いていた。一人一人の振り返りも丁寧に評価し、次時の授業に生かせるよう学びをつなげることができていた。

